

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380709

研究課題名(和文) グローバリゼーションと国際労働移動：Bangladesh 女性労働者の実態調査

研究課題名(英文) International Labour Migration and Globalization: A study on the living conditions of Bangladeshi woman migrants

研究代表者

鈴木 弥生 (Suzuki, Yayoi)

立教大学・コミュニティ福祉学部・教授

研究者番号：80289751

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ニューヨーク市における Bangladesh 出身の女性移民労働者の実態を分析することを目的として、先行研究の分析と実態調査を行っている。グローバリゼーションに伴う国際労働移動は、農村内で過ごすことが一般的であった女性たちをも巻き込みながら展開している。彼女たちの移民労働の目的は、子どもたちや兄弟姉妹の教育や就業機会拡大のためである。調査対象の女性たちは、Bangladesh ではいわゆる中産階級に位置していたものの、移動先では、不安定な労働者階級におかれている。その雇用形態は、未熟練ゆえ、非正規雇用の労働に限定されている。そのため、高騰する家賃の支払いなど、重い生活費の負担に悩まされている。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to analyze the actual living conditions of Bangladeshi women migrants in New York City in the United States. This research is based on previous studies and the author's interviews. International labour migration accompanying globalization has expanded to involve Bangladeshi women who generally lived in rural areas of the country. The purpose of their international labour migration was not only to get a better education, but also to expand employment opportunities for their children and siblings. Interviewees for this research originally came from the quasi-upper-middle class in Bangladesh. However, these Bangladeshi woman migrants have been incorporated into the working-class in New York City and it means a decline in their standards of living. Their forms of employment are part-time jobs or irregular employment as unskilled workers with low wages. They are also plagued by the burden of heavy living expenses such as soaring apartment rents.

研究分野：社会開発論、国際労働移動、Bangladesh 研究

キーワード：Bangladesh アメリカ合衆国 ニューヨーク市 女性移民労働者 移民労働者 労働者階級 貧困

1. 研究開始当初の背景

バングラデシュ人民共和国(以下、バングラデシュ)では、1971年の独立以降、外国主導による援助・開発が行われてきた。しかし、2010年現在でも国民の約3割が絶対的貧困の状態にあり、貧困層を始めとする人々の雇用機会や賃金は低水準のままである(鈴木2016)。そのため、こうした状態から脱出すべく単身で海外出稼ぎ労働(移民労働)に就いたり、家族構成員とともに海外移住を希望したりする人々が急増している。

その移動先をみると、約8割が湾岸諸国で占められている。その大多数は農地の売却や借金によって移民労働に就いたにもかかわらず、高額な斡旋料を支払い、長時間・低賃金といった劣悪な条件で雇用されていることが先行研究や筆者による現地調査を通して明らかになっている。これに続いて、アメリカ合衆国への移動や移住を希望している人々が急増しているが(Hassan 2008)、実際にはどのような生活状態になっているのであろうか。

アメリカ合衆国は、永住権取得のためのビザ発給者を抽選で選定するダイバシティ移民ビザプログラムを1990年の移民法で制定し、1995年度から実施している。折しもこれ以降、永住権を取得するバングラデシュ出身者は増加傾向にある。これに伴い、アメリカ合衆国からバングラデシュへの送金額も増えている。そのため、先行研究では移民労働者による送金が本国の外貨獲得や家計に及ぼす影響に焦点が当てられてきた。しかしながら、移動や移住先での移民労働者の生活や労働実態については必ずしも明らかにされていない。

そこで、アメリカ合衆国のなかで移民労働者が最多を占めているニューヨーク市に滞在して調査を開始した。その成果の一つとして、自己選択によって移動した女性が移民労働に就いていることが明らかになった。そのなかには、農村出身者も含まれている。こうした現象は、農村内で過ごすことが一般的であったイスラーム教徒の女性たちとその家族構成員にどのような影響を及ぼしているのであろうか。そもそも、これら女性たちは、何を目的としてどのようにアメリカ合衆国に向かったのであろうか。そして、どのようにして生活を構築してきたのであろうか。

グローバル化の進展に伴う国際労働移動についてみると、バングラデシュ出身女性のアメリカ合衆国での生活実態や労働実態については、これまで取り上げられてこなかった。そのうえ、こうした移民労働が本人や家族構成員に及ぼす影響についても、管見の限りでは明らかにされていないのである。

2. 研究の目的

グローバル化の進展に伴う国際労働移動のなかで、女性移民労働者に焦点をあ

てて現地での実態調査を行う。調査対象地域は、申請者が15年ほど調査を継続しているバングラデシュ(送り出し国)およびバングラデシュ出身の移民労働者が増加傾向にあるニューヨーク市を受入先・地域として選定する。

具体的な調査項目は、移民労働の目的、移動や移住方法と移住年数、職種や賃金、就学歴、家族構成員の生活状態、送金あるいは家族構成員の呼び寄せとそれによる彼女・彼らへの影響である。そのうえで、バングラデシュ出身の女性移民労働が本人や家族構成員のウェルビーイング向上に結びついているのか、また、国際間での政策課題について分析する。

3. 研究の方法

バングラデシュ出身の女性移民労働者は、男性が先に移動あるいは移住した国や地域に出向いているといった傾向があることから、女性のみならず男性をも含めた調査を継続してきた。

具体的には、2014年度と2015年度の夏季休暇期間、2016年度の秋季休暇期間、2017年度の海外研究期間、ニューヨーク市に滞在して、文献や資料収集およびバングラデシュ出身の移民労働者から聞き取り調査を行った。

折しも、2016年度にKabeer(2000)(=遠藤環・青山和佳・韓載香[訳](2016)『選択する力 バングラデシュ人女性によるロンドンとダッカの労働市場における意思決定』ハーベスト社)の翻訳記念・講演会がカピルを交えて日本で開催され(於:文京シビックホール)そこに参加している。ここでは、ダカとロンドンでそれぞれに衣類縫製産業に関わるベンガル人女性たちが、異なる雇用形態へと組み込まれていった背景や事例を通して、「就業に関する意思決定」や「選択」に焦点をあてた議論がなされている。

2017年度は海外研究のため、コロンビア大学の客員研究員としてニューヨーク市に滞在した。同期間、バングラデシュ出身の移民労働者からの聞き取り調査、留学を目的としてバングラデシュからアメリカ合衆国に移動したのち、専門職に就いて移住した人々が自主的に運営しているNGOへの参加と意見交換のほか、南米出身者が形成するコミュニティでの参与観察と聞き取り調査を行った。また、移民政策の廃止や見直しが議論されていることに対して、当事者を中心とする大規模な反対集会が開催されたため、参与観察と少数ではあるが参加者から聞き取り調査を行った。

さらに、コロンビア大学キャンパス内に複数ある図書館での文献および資料収集、同大学南アジア研究所の定例研究会参加のほか、Sen, Amartya and Bilgra, Akeel, Society at a Crossroads(2017年4月28日、於:Rubin Museum of Art)、The Annual Global South

Asia Conference: Justice on the Move (2018年2月23、24日、於：ニューヨーク大学)各研究会(ニューヨーク市立大学、ニューヨーク大学)にも参加して研究の一助としている。

4. 研究成果

(1) ダイバシティ移民ビザプログラム

ダイバシティ移民ビザプログラムは、施行年度の1995年よりバングラデシュにおいても広く知られるようになった。このプログラムを利用してニューヨーク市に移住した人々によれば、この情報は、新聞やダカにある海外移民労働者のための斡旋業者、それら斡旋業者と関係している農村内のブローカー等によってバングラデシュ全土に伝えられていった。

こうした結果、バングラデシュ国内での応募者は年々増加していった。とりわけ、2012年度の応募者は766万人を超過するほどであった。すなわち、バングラデシュ労働力人口の約9人に1人がこのプログラムでのビザ取得を目指して応募しているが、各年度において永住権を取得した人の数は制限されている。そして、このプログラムでのビザ発給が割当数に達したという理由から、2013年度以降、ベンガル人を対象とする募集は行われていない。

(2) 永住権

United States (2016)によれば、2012年度にアメリカ合衆国の永住権を取得した外国人は103万1631人である(p.12)。その取得方法は、家族スポンサー19.6%、雇用ベース14.0%、アメリカ市民権を持つ人の直接親族46.4%、ダイバシティ移民ビザ3.9%、難民・亡命者14.6%、その他1.5%に大別される(United States 2012, p.27より筆者算出)。また、アジア出身者が全体に占める割合は約40%である。最も多いのは、中国(8万1784人)続いて、インド(6万6434人)、フィリピン(5万7327人)、ヴェトナム(2万8304人)、韓国(2万846人)、ミャンマー(1万7383人)、パキスタン(1万4740人)そして、バングラデシュ出身者が1万4705人である(ibid., 2016, pp.6-10)。バングラデシュ出身者の特徴は、約9割が家族と親戚を通して永住権を取得していることである(ibid., 2012, p.27より筆者算出)。

アメリカ合衆国の移民政策は、本人に同行する家族構成員を受け容れてきた。この方針は、家族構成員との時間を重んじるバングラデシュ出身者にとっても受け容れやすいものであった。しかしながら、トランプ政権に移行した2017年度以降、新たに家族構成員を呼び寄せることが困難になっている。これにより、市民権を取得して配偶者や子どもたち、また両親を呼び寄せようとしていた人々のなかに憤りや混乱がみられる。

(3) ニューヨーク市におけるバングラデシュ出身の移民労働者

ニューヨーク市において、バングラデシュ出身の移民労働者を対象として行った現地調査の範囲内ではあるが、現時点においては以下のことが明らかになっている。

移動や移住の目的は、自身のより良い生活を求めて、職業選択の機会の幅が広がるからと家族構成員に勧められ自身もそのように期待していた、専門職に就いていたのでその技術をさらに活かしたい(以上、男性)、家族への送金、家族構成員のより良い生活を求めて、子どもたちの教育や職業選択の機会を考えるとアメリカ合衆国のほうが適していると考えた、兄弟姉妹の将来を考えて(以上、女性と男性)が主であった。

バングラデシュ出身の移民労働者の過半がアメリカ合衆国のなかでニューヨーク市を選択したのは、家族や親戚、あるいは知人が移住していたこと、他の大都市と比較して労働需要が大きいということのほか、バングラデシュ出身者の商店街があること、ハラル商品を手しやすきことによる。

これら移民労働者のほとんどは、当初より、永住権を取得してから5年後に市民権を得ようとして計画している。市民権を得たのち、既婚者の殆どは、バングラデシュに残してきた配偶者や子どもたちをニューヨーク市に呼び寄せている。そのうえ、大多数の人は、自身の父母をも呼び寄せることを希望している。

そのため、調査対象者の大多数は、長期移住を選択している。ただし、これら移民労働者は、母国の家屋や屋敷地を売却してきたわけではない。彼女・彼らの出身世帯を概観すると、アメリカ合衆国への移動・移住以前に家屋と屋敷地を所有していなかったのは1人(男性)のみであったが、移民労働による送金によって家屋を建設している。また、この世帯を除いて、母国の家庭ではメイドを雇用していた。

学歴は、女性・男性とも相対的に高水準で、全員が高等教育修了証(Higher Secondary School Certificate: HSC)を修得している。さらには、バングラデシュ国内での学士や修士号修得者もみられる。それでも、彼女・彼らは「出身世帯では、子どもたちをアメリカ合衆国に留学させるほどの資産を所有していない」と回答している。

バングラデシュ国内における前職は、女性・男性ともに、技術者、政府関係者、教育職、そのほか、政府役人(男性)も含まれているが、就労経験のない人々もみられる。これに対して、アメリカ合衆国への移住後に専門職に就いている人はみられない。

母国で専門職に就いていた人々のなかで、男性に関しては、アメリカ合衆国移住後もその仕事に就きたいと望んでいる。しかし、10年以上、あるいは、20年以上ニューヨーク市に移住している人々のあいだでも、専門職に就いている移民労働者はみられない。

そもそも、全調査対象者は、先にニューヨーク市に移住したバングラデシュ出身者のつてを頼って職に就いている。そこで現在の職種をみると、フランチャイズ店員、パブの看板持ちと宣伝用チラシ配布、ベンガル料理店でのウェイトレスやウェイター、地下鉄キオスク（夫妻や兄弟による自己雇用）およびその店の手伝い（以上、女性と男性）、レジスター、店内での雑用全般（以上、女性）、路上行商、タクシー運転手（以上、男性）であった。雇用形態は、非正規雇用のパートタイム労働である。路上行商人のなかには自己雇用もみられるが、その殆どは、季節労働という雇用形態で働いている。すなわち、戸外が冷え込む冬季には労働需要が極めて少ない。そのため、その数カ月間は母国の家族のもとに帰国している人々もみられる。

(4) ニューヨーク市におけるバングラデシュ出身の女性移民労働者

バングラデシュ出身の移民労働者のなかで、自己選択によってニューヨーク市に移住している女性たちについてみると、その目的は、自身のウェルビーイング向上というよりも、子どもたちや年齢の離れた兄弟姉妹のより良い教育のみならず職業選択の機会を広げたいというものである。

その背景には、バングラデシュ政治経済の不安定、雇用機会の不足、世界的にみて相対的に低い賃金水準といった国内の社会・経済的問題がある。

また、これら女性たちは、家族構成員に同伴してアメリカ合衆国に移動しているわけではないものの、従兄弟や実兄弟がすでにアメリカ合衆国に移住して彼らの妻と子どもたちを呼び寄せている。そこで、バングラデシュの父母に相談してから、彼らに連絡をとって移動したのち、同居（居候）している。だが、数年以内に住居を別にしている。ここでは、狭い居住空間や家事負担の問題が顕著である。高騰し続ける賃貸アパート代は、移民労働者にとって大きな負担となる。大家族であっても農地や居住空間を所有して家事全般をメイドに依存していたバングラデシュでの生活との違いは顕著である。そのうえ、家族構成員を呼び寄せて生活を維持するためには、必然的に長時間労働とならざるを得ない。女性たちは、現金収入のすべてを生活費と家族呼び寄せのための費用に充てている。

そして、現地での数年間におよぶ継続的な調査から、当初より自らの家族構成員をニューヨーク市に呼び寄せることを計画していた女性たちは、それを実現させていることが明らかになっている。自分の子どもや年齢の離れた兄弟姉妹たちの幸せが自らの幸せであると断言する女性たちは、バングラデシュでは体験したことのない長時間労働とストレスの多い地下鉄通勤、家事負担、さまざまな精神的ストレスに直面している。調査対象

の女性たちは全員がイスラム教徒である。そのため、戸外であっても就業中にオロナを身に着けている女性もみられる。だが、2017年度以降、地下鉄内でのオロナ着用による不安を覚えるようになったと回答している。

また、呼び寄せられた家族構成員は、当初、狭い家屋、宗教や文化の違い、友人の問題等に直面している。そのうえ、生活費を工面するために、順次、パートタイム労働に出されている。かつて、農村内において多くの時間を有し、メイドに家事労働のいっさいを任せて談話に興じていた女性たちやクリケットを楽しんでいた少年たちは、ニューヨーク市での生活と労働において、家族内での時間を共有することが困難になっている。

グローバル化による国際労働移動は、農村内で過ごすことが一般的であった女性たちをも巻き込みながら展開している。彼女たちは、母国ではいわゆる中産階級に位置しているものの、移動先のニューヨーク市では労働者階級に位置する不安定な労働者である。

女性移民労働者の自己選択や家庭内での決定権の高まり、語学力の向上等は顕著であり、彼女らのエンパワメントに影響しているものの、それが女性たちのより良い生活に結びついているか否かについては、今後数年間の継続調査を通して慎重に検討する必要がある。現時点においては「長時間労働を理由とする体調不良、極めて限定された職業選択肢、不十分な住環境、家賃や教育費、そして食料品の高騰とそれらの捻出、家事労働の負担増、家族構成員と過ごす時間の減少」等が顕著である。

こうした状況のなかで、ニューヨーク市への移住が移民第2世代の子どもたちにどのような影響を及ぼしているのかについて研究・調査を行う予定である。

<引用文献>

- Hassan, Munir (2008) *Complementarity between International Migration and Trade: A Case Study of Bangladesh in* Andaleeb, Syed Saad (ed.) *The Bangladesh Economy: Diagnoses and Prescriptions*, University Press Limited: Dhaka, Chapter3, pp. 51-71.
- Kabeer, Naila(2000) *The Power to Choose Bangladeshi Women and Labour Market Decisions in London and Dhaka*, VERSO: London and New York (=遠藤環・青山和佳・韓載香[訳](2016)『選択する力 バングラデシュ人女性によるロンドンとダッカの労働市場における意思決定』ハーベスト社)。
- 鈴木弥生(2016)『バングラデシュ農村にみる外国援助と社会開発』日本評論社。
- United States, Department of Homeland Security, Office of Immigration Statistics (2016) *2014 Yearbook of*

Immigration Statistics.
United States, Department of Homeland Security, Office of Immigration Statistics (2013) *2012 Yearbook of Immigration Statistics.*

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

Yayoi, Suzuki, Kazuhiko, Sato and Zane, Ritchie, *A Study on the living conditions of Bangladeshi migrants in New York City* (2017年11月)『立教大学コミュニティ福祉研究所紀要』立教大学コミュニティ福祉研究所, Vol.5, pp.69-89(査読なし).

鈴木弥生 (2017年11月)「アラブ首長国連邦における子どものラクダ騎手：その背景と解放への道のり」『まなびあい』立教大学コミュニティ福祉研究所、第10号、172-180頁(査読なし)。

Yayoi, Suzuki, Zane, Ritchie(2016年11月) *A study on the relevance of poverty to international labour migration - the resent situation of Bangladeshi migrants to the United States* 『立教大学コミュニティ福祉研究所紀要』立教大学コミュニティ福祉研究所, Vol.4, pp.97-113(査読なし)。

〔図書〕(計2件)

鈴木弥生(2016)『バングラデシュ農村にみる外国援助と社会開発』日本評論社、総354頁(日本学術振興会平成27年度科学研究費助成[研究成果公開促進費(学術図書)]15HP5150)。

鈴木弥生(2014)「社会開発とコミュニティ バングラデシュ、現地NGOによる草の根レベルでの活動を通して」坂田周一監修、三本松政之・北島健一編著『コミュニティ政策学入門』誠信書房、第8章所収、142-159頁、総320頁。

〔その他〕

ホームページ等

コミュニティ福祉学部の鈴木弥生教授が「国際開発学会奨励賞」を受賞
鈴木弥生「コメント」2018年1月30日。
(<http://www.rikkyo.ac.jp/news/2018/01/mknpps000000czw1.html>)。

鈴木弥生「受賞の言葉」
国際開発学会『国際開発学会ニューズレター』Vol.29, No.1(通刊第107号)2018年2月1日発行、8-9頁。

拙著『バングラデシュ農村にみる外国援

助と社会開発』日本評論社、2016年
国際開発学会奨励賞受賞によせて(コミュニティ福祉学部 コミュニティ政策学科 鈴木弥生)

(<http://cchs.rikkyo.ac.jp/topics/2018/3872/>)。

6. 研究組織

(1)研究代表者

鈴木 弥生 (SUZUKI, Yayoi)
立教大学・コミュニティ福祉学部・教授
研究者番号：80289751

(2)研究協力者(1人)

佐藤一彦 (SATO, Kazuhiko)
2017年度コロンビア大学客員研究員